

土器動態からみた弥生時代地域社会構造の研究

石田, 智子

<https://doi.org/10.15017/1455993>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 石田 智子

論文題名 : 土器動態からみた弥生時代地域社会構造の研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

北部九州地域は日本列島と東アジア世界をつなぐ結節点に位置し、東アジア世界の動向に密接に関連しつつ進行した社会変容プロセスを明瞭にトレースし検討できる地域である。弥生時代中期は、日韓海峡を介した物資・人・情報の相互交流が活発に行われ、社会の複雑化が進展した段階である。本論は、多様な規模・種類の重層的な集団構造や関係で構成される当該地域・時期の弥生社会を対象として、社会変化プロセスを実証的に解明することを目的とする。具体的には、一貫した基準で時空間動態を把握することができ、多様な空間スケールやコンテキストに応じた分析が可能な土器を主要な分析の対象とする。土器の原材料採取から製作に至る自然環境との関係、使用や廃棄に関わる社会的側面など、各段階の行為や文化的背景への接近を可能とする土器諸属性を抽出し、まず、各属性のバリエーションから析出したパターンの通時的および空間的变化を捉えることで、弥生時代中期において地域社会が成立・展開するプロセスや要因を検討した。つづいて、地球科学的分析手法を適用した胎土分析を実施し、個々の土器の具体的生産地を可能な限り限定する作業をおこない、情報の伝達・共有と物の動きとの関係を検討した。そして、両成果を統合することで、物質文化動態と社会変化との相関性を解明した。

研究の目的・研究史の到達点と問題の所在を整理し、その解釈のための方法と資料を確定した第1～3章につづき、第4章では、土器に反映された地域社会の空間的範囲の実態とその動態を分析した。具体的には、型式学的手法に基づき形態的特徴を共有する範囲を検討し、地域的特徴を示す器種や属性を析出した。さらに、地域的なまとまりを示す空間範囲内部の多様性や関係性を明らかにするために、従来看過されてきた文様・塗彩などのデザイン関連諸属性の質的差異を検討し、加飾した土器に付与される意味がそのような範囲相互の間で異なるという点を指摘した。以上を通じて、従来均質に捉えられていた地域内部に存在するマイクロな地域性および地域間関係の変容プロセスが明らかとなり、その結果社会変容が当該地域全域に一律に生じるのではなく、時期差・地域差をもって多様に展開する状況が明らかになった。すなわち、弥生時代中期前半期までは、隣接地域が相互に連鎖して土器諸属性の共有範囲が拡大することで、地域全体の斉一性が形成される。しかし、中期後半期になると、地理的に隣接しない地域間にコンタクトが生じ、特定要素をもった土器が特定地域や遺跡に集中的に分布するようになる。特に、祭祀儀礼的行為に使用されたと考えられる土器に、このような傾向が強く認められた。同時に、祭祀儀礼的結集の基盤にある、集団間の日常的な相互交渉およびその変化を把握することの重要性も明らかとなった。

つづく第5章では、弥生土器の物質特性を考慮した地球科学的高精度胎土分析方法を新たに開発し、具体的な考古資料に適用した。前章で考古学的研究手法によって土器諸属性の時空間的差異を検討し、集団関係の具体像の復元を試みたが、特殊な原材料を用いない土器の場合、肉眼による土器移動の検証や、土器情報伝達が生じるメカニズムの検討は困難である。日常的な集団間の相互交

渉を復原するための基礎となる土器の製作地や生産単位を検討する上で、土器の原材料物質そのものに直接アプローチできる胎土分析は非常に有効な研究手段である。特に、特定地域間関係が活発化する弥生時代中期後半期の玄界灘沿岸地域に焦点をあて、地域社会の形成基盤となる集落内の居住集団関係や近隣集落関係、地域社会を広域社会に位置づける遠隔地域間関係の多様な空間スケールを対象に、土器の生産と移動を検討し、地域的特徴や変化が発現する過程や要因を論じた。分析の結果、基本的に土器は各集落単位で生産されること、同一集落内で異なる系統／製作伝統に属する土器が共伴しても、両者の生産単位は一体化せず自律的に併存することが明らかになった。さらに、玄界灘沿岸地域から壱岐島へと、遠隔地域間で土器が移動する現象を詳細に検討し、土器の搬出元を絞り込むことを通じて、土器の移動現象の背後にある具体的メカニズムの解明を試みた。弥生時代中期後半期に遠隔地域間で土器が移動する事象は、当該期に西日本一円の集団が鉄などの稀少資源を求めて韓半島との交渉を開始する現象と対応しており、後期以降に顕著になる広域社会間交流の先駆けを示すものであることが明らかとなった。

以上の考古学的分析および地球科学的分析の成果を統合して、第6章では、ここまで解明した土器動態が、具体的社会変化のプロセスとどのように相関・対応するかを検討した。その結果、先行研究が提唱する、玄界灘沿岸地域を中心とする一元的な空間階層関係が弥生時代中期初頭から一貫して存在したのではなく、土器の移動・影響関係が示す地域社会の中心地は、弥生時代中期初頭から末へと徐々に玄界灘沿岸地域、特に福岡地域と糸島地域に集約していったというプロセスが明らかになった。北部九州地域の弥生時代中期は、社会の複雑性は増大しているものの、多様な変異の生成と収斂が繰り返される流動的な段階であり、社会構造は徐々に複雑化しつつも、高度な複雑化・成層化は遂げていない可能性を指摘した。

本論の特徴は、考古学と地球科学の融合研究の実践である。従来胎土分析の精度では、分析成果を歴史叙述に十分に活かすことができなかった。本論で提示した地球科学的高精度胎土分析手法は、詳細な考古学的分析の結果と対比することを通じて土器動態の解明に寄与する精度を保持しており、そのことを用いて、北部九州地域弥生時代中期の社会動態のミクロからマクロな位相にわたる解明に、土器研究の立場から具体的貢献をおこなうことができた。